

武蔵野日曜集会

真偽如何

――ヨハネ伝第8章31～59節――

1967年12月17日(武蔵野)

小池辰雄

即身即真 紀要「ルターとシラー」 真理の奴隷 信実と真実と真理 キリストという真言 在らしめられている存在 靈法に従うのが自由 アブラハムの投げ込み 絶対無条件の恩寵の世界 碧眼録の第23則 聖霊の試練 聖霊の試金石

【ヨハネ8・31～59】

31爰にイエス己を信じたるユダヤ人に言いたもう『汝等もし常に我が言に居らば、真にわが弟子なり。 32また真理を知らん、而して真理は汝らに自由を得さすべし』 33かれら答う『われらはアブラハムの裔にして未だ人の奴隷となりし事なし。 如何なれば「なんじら自由を得べし」と言うか』 34イエス答え給う『まことに誠に汝らに告ぐ、すべて罪を犯す者は罪の奴隷なり。 35奴隷はとこしえに家に居らず、子は永遠に居るなり。 36この故に子もし汝らに自由を得させば、汝ら実に自由とならん。 我は汝らがアブラハムの裔なるを知る、されど我が言なんじらの衷に留らぬ故に、我を殺さんと謀る。 37我はわが父の許にて見しことを語り、汝らは又なんじらの父より聞きしことを行う』 38かれら答えて言う『われらの父はアブラハムなり』 39イエス言い給う『もしアブラハムの子ならば、アブラハムの業をなさん。 40然るに汝らは今、神より聴きたる真理を汝らに告ぐる者なる我を殺さんと謀る。 アブラハムは斯ることを為さざりき。 41汝らは汝らの父の業を為すなり』 42かれら言う『われら淫行によりて生れず、我らの父はただ一人、即ち神なり』 43イエス言いたもう『神もし汝らの父ならば、汝ら我を愛せん、われ神より出でて来ればなり、我は己より来るにあらず、神われを遣し給えり、 44何故わが語ることが悟らぬか、是わが言をきくこと能わぬに因る。 44汝らは己が父、悪魔より出でて己が父の慾を行わんことを望む。 彼は最初より人殺しなり、また真その中になき故に真に立たず、彼は虚偽をかたる毎に己より語る、それは虚偽者にして虚偽の父なればなり。 45然るに我は真を告ぐるによりて、汝ら我を信ぜず、 46汝等のうち誰か我を罪ありとして責め得る。 われ真を告ぐるに、我を信ぜぬは何故ぞ。 47神より出づる者は神の言をきく、汝らの聴かぬは神より出でぬに因る』 48ユダヤ人こたえて言う『なんじはサマリヤ人にて悪鬼に憑かれ



たる者なりと、我らが云えるは宜^{うべ}ならずや』⁴⁹イエス答え給う『われは悪鬼に憑かれず、反って我が父を敬う、なんじらは我を軽んず。⁵⁰我はおのれの栄光を求めず、之を求め、かつ審判し給う者あり、⁵¹誠にまことに汝らに告ぐ、人もし我が言を守らば、永遠に死を見ざるべし』⁵²ユダヤ人いう『今ぞ、なんじが悪鬼に憑かれたるを知る。アブラハムも預言者たちも死にたり、然るに汝は「人もし我が言を守らば、永遠に死を味わざるべし」と云う。⁵³汝われらの父アブラハムよりも大なるか、彼は死に、預言者たちも死にたり。汝はおのれを誰とするか』⁵⁴イエス答えたもう『我もし己に栄光を帰せば、我が栄光は空し。我に栄光を帰する者は我が父なり、即ち汝らが己の神と称する者なり。⁵⁵然るに汝らは彼を知らず、我は彼を知る。もし彼を知らずと言わば、汝らの如く偽^{いつわりもの}者たるべし。然れど我は彼を知り、且その御言を守る。⁵⁶汝らの父アブラハムは、我が日を見んとて楽しみ且これを見て喜べり』⁵⁷ユダヤ人いう『なんじ未だ五十歳にもならぬにアブラハムを見しか』⁵⁸イエス言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、アブラハムの生^{うま}れいでぬ前^{まへ}より我は在るなり』⁵⁹爰に彼ら石をとりてイエスに擲^{なげ}たと為^したるに、イエス隠れて宮を出で給えり。

●即身即真

³¹爰にイエス已を信じたるユダヤ人に言いたもう

この「信じた」と言いまして、これは言葉の本来の深い意味における「信じた」のではなく、まあ一応、知的に受けとっているといった観念的な信じ方です。特にこの場合の「ユダヤ人」というのはそういったユダヤ人の中のいわゆる「ユダヤ人」といわれる人々たちですから。「信ずる」という字はもちろん一般の信仰の「ピステオー」という字が使っておりまけれども。

『汝等もし常に我が言に居らば、真にわが弟子なり。』

このキリストの言葉は、

「我が言の中に、いつまでもコンスタントに絶えず留まっているならば」

という、非常に深い強い内容でありまして、「言の中に宿り込んでいるならば」ということで、これは非常に大事なことです。

私たちにとって、キリスト者にとって、聖書というものがただいわゆる頭の真理、教えというようなことではなく、神の現実の言——私たちの生活の原動力となり、支配するところの——そういった言である。そうでなければ、「言の中に留まっている」というような言い方をなさるわけではない。そうであるならば、「真にわが弟子である」という。

³²また真理を知らん、而して真理は汝らに自由を得さすべし』



これで、いかに「真理」ということが、私がいつも言うように、身についていなくてはいかんかということが分かる。この「身についている」という事態のみが「真理」と言われる言葉である。キリストが言われる「真理」というのはそういうもので、それを「知る」と言っている。この「知る」が決して頭で知るということではなくて、

「神の言の中に内在している、留まっている、宿っているという事態ではじめて真理の真理たることが身体でもって、全存在でもって分かるぞ」

ということです。

キリストの言を読むときに、今の一般のいわゆる学問的な、知識的な、そういった概念角度でこれに当たって、いわゆる聖書研究、いわゆる解釈、釈というようにことをやっていたのではもう、最初のズレが来ている。そのことは、皆さんがよく肝に銘じていただかないと困るわけです。そして、そういった真理というものは身につくから、即ち、私たちの自身が、この身そのものが、即身、即真という――もちろんこの即においてこれが現実に全体に真にはなりませんけれども――本質的にはその溶け合い、連なりというものがここに感ぜられるわけです。そうしたらば、

「そういう真理であるから、お前たちは本当に自由がそこにあるんだぞ」という。

●紀要「ルターとシラー」

自由とは、何かから解放されることではない。キリストのこの言葉は、何かから解放されることではなくて、

「そういう真理の中にあれば、その全存在が真に自由自在だ、天衣無縫的である」

という、非常に力強い内容であります。そのことは実は私が、「ルターとシラー」という紀要に書きました。これは去年の秋に北海道大学で講演したときの内容ですけれども。ちょうど今日それが出てきたので、そこを皆さんに読んでおきましょう。

「まず福音書の中、ヨハネ福音書8章31節から36節のイエスの言が最も端的にこの問

題に光を投じている。

「この問題」というのは新約における自由の問題です。その33節から36節まで読んでみますと、

「³³かれら答う『われらはアブラハムの裔にして未だ人の奴隷となりし事なし。

如何なれば「なんじら自由を得べし」と言うか』³⁴イエス答え給う『まこと

に誠に汝らに告ぐ、すべて罪を犯す者は罪の奴隷なり。³⁵奴隷はとこしえに

家に居らず、子は永遠に居るなり。³⁶この故に子もし汝らに自由を得させば、

汝ら実に自由とならん。』(ヨハネ8・31～36)

即ち、イエスは「真理は汝らに自由を得させる」と言ったが、彼らユダヤ人はその意味がわからないので、自分たちはアブラハムの子孫だから社会的に自由をもってい



る。それなのにあなたは何で自由を得させる、などとおっしゃるか、と的はずれの反問をしている。イエスのこれに対する応答が決定的なポイントを衝いている。「罪を犯すものが罪の奴隷である」と。即ち罪に対するものは真理(義)であり、奴隷に対するものは自由(自主)である。社会的な自由人が奴隷かの問題ではなく、実存の問題として自由か奴隷かの問題で、真理に即するか、罪になすむかの問題である。……イエスはヨハネ14章6節で「われは道なり、真理なり、生命なり」(エゴ エイミ ヘー ホド スカイ ヘー アレティア カイ ヘー ヅエー)と明言している如く、真理の主体はキリスト・イエスその人である。この定冠詞をもった力強い断言命法的な表現は「私は真理そのものである」「我即真理」といった語調である。真理の体現者でなければ、このような断言はできない。イエスにとっては、我も真理も道も生命も皆「即」の字を以て連なっている。それであるから彼が、「汝らもし常にわが言に居らば」と言っているのに注目しなければならない。このギリシア語原典を直訳すると、「もしも君たちが私の言(ロゴス)の中にとどまっているなら」というのであって、それも「私というロゴスの中に」(エン トー ログオー トー エモー)といった根源的なびびきを感じさせられる表現である。イエスは神のロゴスの化体者(フエアケルペテス ザイン)である。それゆえにイエスの言にとどまる、ということとは結局イエスの言にあって、イエスその者に即していつまでもいるなら、ということになり、「真理は汝らに自由を得させる」とは、イエスという真理に即して実存するなら自由が得られる、という意となる。ここで罪からの解放という問題よりも、もう一步突っ込んで真理に即する事態そのものに自由がある、という消息である。何となれば、イエスという生きた真理そのものが自由であるからである。この辺にヨハネ福音書の深さがある。

こういった「即」的真理の消息がイエスに愚問を發するユダヤ人どもにわかるはずがない。福音書をよんで、そこに展開されているイエスとユダヤ人との劇的な問答を見ると、どれもこれもこういった次元の相違を暴露している。それほどまでに一方イエスはそのものずばりの人間であるのに、他方律法をひねくりまわしたり、律法を儀文化したり、律法に誇っている教法師、祭司、パリサイ人等は律法の奴隷となっているのを見る。ここでもイエスから逆に、彼らが虚言、殺人の元祖たる悪魔の子らたるを自証するに過ぎないとの結論に追いこまれてしまう(ヨハネ8・44)。

さて、われわれはパウロにおいて「自由」はどのような内実をもっているかを見ようと思つのであるが、……

と言って、パウロのことを書いて、十字架の贖罪のことを言ったわけです。そこは省略しますが、それからそのあとで、

自由が自由たる実力をもつためには十字架と表裏する他の半面の事実がそこに現じなければならない。このことを端的にあらわしている言がある。それはパウロが「コ



リント人への第二の手紙」の中で語っている言葉である。『主は即ち御霊なり、主の御霊のある所に自由あり』(コリント後3・17)。キリストは霊(プニューマ)である。この霊は特に聖霊と言われる霊である。そしてこの聖霊のあるところにこそ自由がある。即ち十字架の贖罪を信受した現実は、あるがままの自分であるにもかかわらず、自我からはずされた無私の場合、無我の現実が、自由にされた現実がそこにある。それは喜悅の現実ではあるが、未だ空白な現実である。何ものかを信受しなければならぬ空白である。そこで祈り求めて受けとる内実が聖霊である。それ故、十字架のキリストと復活昇天して聖霊を与えるキリストとをばらばらにしてはならない。否、十字架を本当に信受すれば必然これに伴って信受されるものは聖霊なのである。

この二者は不可離な事態なのである。ところが現今のキリスト教界には、この十字架・復活・聖霊の事態を実存的にのっぴきならない恩寵の現実として信受していない場合が多いようである。問題の焦点はそれゆえに聖霊のバプテスマを使徒たちのように本当に受けるか否かにかかっている。それゆえ、私は「使徒的信仰に帰れ！」と叫ばざるを得ないのである。真の「自由」は正に聖霊信受の内実において存する積極的な現実であって、単に罪からの解放だけではないのである。ここに旧約の解放的自由と新約の充満的自由との差がある。「あがない」の自由から「みたま」の自由へと必然展開しなければならぬのである。かくて「自由」は今や聖霊の実力によって裏づけられた力ある自由である。

しかし、人間が人間である限り、つねにサタンの力ある罪の誘惑に曝されている危機的存在である。これにうち克つためには、聖霊の内住を必要とする。そのためには祈りという魂の在り方が恒常的になっていなければならない。パウロは更にガラテヤ人に次の如く勧めている!『兄弟よ、汝らの召されたるは自由を与えられんためなり。ただその自由を肉に従う機会となさず、反って愛をもて互に事えよ』(ガラテヤ5・13)。即ち、ガラテヤ人たちがキリストの召命を受けたのは、自由を与えられるためであった。けれども彼らが律法からの自由を身勝手な自由気ままとはきちがえて「肉」即ち自己中心的な在り方を促進させるようなことをしないで、愛によって互に奉仕するように勧告している。自由が愛と相即する事態は、聖霊が神の愛の霊であるから、聖霊による自由は当然愛の実力をそこにもつことになる。トマス・アクイナスも、『聖霊の最初の名は愛である』といっている。かくてみ霊の力ある自由こそ愛としてはたらく人間実存の極致をそこに現するのである。

以上が旧新約聖書における

旧約のことはすっかり略しましたが、

自由の根本性格と内実の骨子である。そしてルターはこの事態をとらえて、彼の有名な『クリスチャンの自由』を書いた。云々(小池辰雄著作集第6巻『聖書の人ルター』385



390頁所載)

●真理の奴隷

そういうことで、キリストの今の問答で見るように、罪の奴隷となるか、また真理に即して自由となるか。「奴隷」という言葉はあまりいい言葉ではないけれども、奴隷というのはもう今は社会的にない。聖書の書かれたときには、奴隷というのがまだ社会的には事実あったものですから。罪の奴隷、これが今度は、真理の奴隷となる。奴隷というのは即的なわけですから。それに従属しているから。あちらが主で、こちらが従ですから。その主従の関係になって、罪が主となってそれに従うか、真理が主となってそれに従うか。この真理のところに本当の自由がある。罪は逆に本当の不自由になってしまうわけです。

36 ……我は汝らがアブラハムの裔^{すえ}なるを知る、されど我が言なんじらの衷^{はか}に留らぬ故に、我を殺さんと謀る。

一向留まらないから、アブラハムの肉の裔であつても、私を殺そうとしているではないか。何がアブラハムの裔か、というわけです。

37 我はわが父の許にて見しことを語り、汝らは又なんじらの父より聞きしことを行う』

そこでキリストは、「なんじらの父」という言い方をしている。私は「わが父」のもとでつらつら見たことを行っているが、お前たちはお前の父から聞いたことを行っている。まるで世界が違うんだと。

38 かれら答えて言う『われらの父はアブラハムなり』

「父」というのはもちろん「祖先」というわけです。アブラハムは信仰の祖で、こっちは血統的にも直系で正統派だ、というようなわけです。

39 イエス言い給う『もしアブラハムの子ならば、

本当に信仰の祖アブラハムの子ということが実質ならば、

アブラハムの業をなさん。

アブラハムと同じその信仰の業をするはずだと。ローマ書4章にアブラハムのことが出てますから、あるいは9章、ガラテヤ書4章をあとでゆくり開いて見てください。

40 然るに汝らは今、神より聴きたる真理を汝らに告ぐる者なる我を殺さんと謀る。

私は神さまから聞き、神さまにおいて見たことを告げている。その私を殺そうとする。

アブラハムは斯ることを為さざりき。

とんでもないはなしだと。

41 汝らは汝らの父の業を為すなり』かれら言う『われら淫行によりて生れず、我らの父はただ一人、即ち神なり』



と、まことに立派な答えをしたわけです。

42 イエス言いたもう『神もし汝らの父ならば、汝ら我を愛せん、われ神より

出でて来ればなり、我は己より来るにあらず、神われを遣し給えり、

「私は自分から来ている者ではない。自分は神さまの遣いなんだ。神さまから、父から出ていると言うなら、私を当然愛するはずなのに」

と。全然それが食い違っている。同じ「父」という言葉を使っても、また「アブラハムの父」なんて言ったって、それはお前たちの判断はとんでもない間違いをしている。その証拠はこうじゃないかと、キリストは言われるわけです。

「愛もしなければ、へたすると、殺そうとしているではないか」

というわけです。だから、自分たちは神から出て神を父とお前たちは言っているが、

43 何故わが語ることを悟らぬか、是わが言をきくこと能わぬに因る。

聞いても、ちっとも本当に聞いているのではない。見ても、見ているのではない、というわけです。

44 汝らは己が父、

いよいよ、キリストははっきり言われた。

悪魔より出でて己が父の欲を行わんことを望む。彼は最初より人殺しなり、

それは虚偽者にして虚偽の父なればなり。

神に背いた者、離反した者、離反者です。それが悪魔。その離反というのはどういふところからきているかというと、いわゆる自己義認の自己中心です。もともとこれは立派な天使だった。立派な天使が自己中心になったものだから、神から離反した。「の中に居る」という世界、さっきの「留まる」という世界ではなかった。いわゆる自由独立の衝動を持っている。今の大学問題の、学生の自主がとんでもない自主になっているから、それがちょうど今日のサタンの的な角度になっている。

これが自己中心で、自己義認で、我欲である。だから、神に即するものに対して、何とかしてこれを滅ぼしてしまおうとする。

「彼は最初より人殺しである」

と。カインとアベルの話があります。カインが穀物を献げ、アベルが小羊を献げた。自分の献げが真心であるならば、全的であるならば、穀物であろうと小羊であろうと何だつていい。ところが、アベルに対してカインの中に妬みの心が起きた。妬みというやつがくせものです。しかし、「妬み」というのは、

「我は妬みの神である」

という言葉があるくらいに非常に躓きの言葉です。

他と比較してどうのこうのと言うことがもうこの「妬み」の衝動です。これが人間の非常に悪い癖です。



「神さまはどうして自分をこんなふうにつくつたのだろうか」

と。「どうも自分の運命は」とか、「自分の才能は」とか言つて、いろいろ比較論をして苦情の気持ちが出てくる。そいつが妬みです。これがもう分裂の衝動です。

もうひとつは、驕りおこりです。妬みと驕り。

「俺はかくのごときものである」

と、今度はいわゆるエリートの人たちが驕りの気持ちをもつ。コンプレックスの方からくる妬みと、それから、優越感からくる驕りと、これはどちらも悪い。傲慢がやはりサタンの霊である。また、妬みがそういったサタンの霊である。そういったものが私たちの中に悪い働きをしようと思つて、付け狙つてゐるわけだな。カインは妬んで、とうとうアベルを殺してしまつた。人類の歴史はカインとアベルの反復ですよ、最後に至るまで。

●信実と真実と真理

また真まことその中になき故に真に立たず、彼は虚偽いつわりをかたる毎に己より語る、

ここに「真」という字と「偽」という字が出てきた。それで私は今日は「真偽如何」という題を掲げたわけです。

「我々はダメだ」

という。パウロも言つてゐるとおり。キリストだけが本当の真まことである。

「人間的眞実なんていうことをいくら言つてみたつて始まらん」

と。それでは、どうしたらいいか。

もちろん、私たちの相対的な意味における心情の「まこと」ということは大事なことですよ。主観的な眞実も、また人間との関係との「トロイエ」——私はこの「トロイエ」の方は「信実」と書く——人との関係を裏切らない。それから、自分の心情における主観的な眞実性。これはもちろん大事なことです。藤井先生が非常にこの「眞実」のことを強調されましたが、ヒルティさんはこつちの「信実」です。「トロイエ」が人間の人間たる一番大事なことであると言う。日本の武士道における「トロイエ」というものは、こないだの12月14日の赤穂義士の——私は赤穂義士の日がくると、やはり静かに瞑想する——こういったものももちろん大事なもののだが、しかし、こういった信実とか眞実——「トロイエ」(信実)とか「ヴァールハフテツヒカイト」(眞実)とか——というものの元になるものは、それが即ちここで言われているところの「眞理」なんです。

「眞理」というものは人間の側からはどうにもならん。

「私は眞理をつかんだ」

と言つたら、それは傲慢です。私たちは「眞理」に向かつて限りなく近づいていく、進んでいく、というだけあります。眞理を尊ぶというのは、眞理の前に本当に謙虚な気持ち。間違つていたら、いつでも兜を脱ぐ、そういうことです。



しかも、真理というのは観念ではない。

「かくかくのことが真理である」

というような、いわゆる人間的な命題で言われるものではない。真理そのものが非常に実存的な性格を持っている。

「その時、その場において、その人において」

という具体性を持っています。「アルゲマインギュルテッヒ」「普遍妥当」というけれども、もちろん、真理は普遍妥当ふへんだとうですけれども、真理が具体的に表現されるときには、具体的に表れるときには、それはいわゆる普遍妥当な姿で表れるのではない。実に特殊な姿をもつて表現されてくる。だから、昨日言ったことと今日言ったことがまるで矛盾したような表現がされても、もうひとつその奥をたずねてみたら、実は同じところから出ていたと。それだけの多様性を持った、一におけるところの、一というものによつて統括されているところの、根底を持っているところの、その表れ方がそれが真理です。

この花、フリージアも、これは花です。また、その菊も花です。花ということにおいては、これは普遍妥当なものです。けれども、この具体的な存在としては、菊は菊であり、フリージアはフリージアである。それぞれが特殊な存在で、他のものと置き換えることができないものを持っている。即ち、花という根底の真理が、この菊と表れ、フリージアと表れている。そういった根底的なもの、普遍的なものと、特殊なものとが即しているところに真理がある。

この福音というものが、甲という人にはこのように表れていた、乙の人にはこのように表れていた。甲の教会ではこのようであり、乙の教会ではこのようであると。いいですよ、どれであつても。ただ、それが本当に根底の真理そのものから発しているか。それに即しているか。それだけが問題なんです。現象を見て、

「いや、それではいかん。こうでなくてはいかん」

というような、現象面における統一性を求めたら、それはとんでもない全体主義になる。全体主義は決して本当の真理ではない。全体と言うならば、多様性におけるところの調和でなければならぬ。有機体的構造でなければならぬ。

そういう意味において、人間の現実のみな破れた現実です。この破れた現実の中に、その破れにもかかわらず、いかなる本ものが常に現われようとしているか。その破れを通して、それを乗り越えて、それに打ち勝って、いつも本ものが展開しているか。そこが問題である。破れをただ外側から繕つて縫つたつて、それはダメです。

私たちがどのような運命環境に、どういうことにでつくわそうが、いいですよ、どれであっても。あれは良寛の歌だったかな。どのような状態であつても、疲れたときは疲れた、泣きたいときは泣いている、笑いたいときは笑っている。それでいいじゃないかと。しかし、それがそこにおいて決して崩れてしまわない。いつもそれから展開して進んで行く。そう



いう境地を良寛も本当のところであつてつかんでいた。

我々キリスト者も、人生でいろんなことにでつくわします。すべて大きな神さまのわけがある。大きな神のわけがある、その端倪すべからざる何故、という、そのわけの中に真理が隠されている。この真理は概念規定のできない凄惨なものである。であるから、この真理に対するのは、実は「知る」というのではなくて、真理は「信」ぜられるところの内容のものであります。この「信ずる」という言葉が同時に、そこにおいてその信・知が一つなのであつて、知が先立つような知り方ではない。

●キリストという真言

そこで、私たちがこの福音書においてキリストという真理の現象体につかつたわけですね。そうしたら、このキリストという真理の現象体を「どうである、こうである」と人間側のこちら側の判断でもって分かるはずのものではない。キリストという現象体に自分を投げかけていくことが、これが「信ずる」ですから。その中に投げかけて、その行為の中に、その言葉の中に、キリストそのものの中に自分を入れることが、

「わが言に居れ」

という言葉です。「我という言」なんだ、キリストは。キリストは言なんだから。これは真言なんだ。

「このキリストという真言の中に来なさい。そうすれば、もはや説明はできなくて、も、真理が何であるかが本当に受けとられてくるぞ。そのときにお前が言うことを為すことの中にそれが現われてくるぞ」

と。そういうわけでありまして、そういう人が本当の真言の真理の中に奴隷となっている人です。その真理の奴隷となつて自由である。マルチン・ルターの宗教改革はその精神である。

ところが、神と離反して、神の中に居るということから離反して、自我中心に自己義認という角度になつたものは――それ自体はなるほどなかなか立派でしょう。結構でしょう。しかし、それはパウロが非常に結構な、

「われ律法につきては責むべきところなし」

という、律法の義のチャンピオンであつた。けれども、これはとんでもない間違いであつた――神さまの前に自分は本当に平伏してゐるのではなかった。キリストの前に本当に平伏してゐるのではなかったということが分からない。だから、とうとうキリストが非常手段を使って、

「パウロ、パウロ、なんで我を迫害するか！」

と。お前はとんでもない180度の間違いをしてゐるぞと。パウロはやつつけられてしまった。自分の義を塵芥ちりあかの如くして彼は捨ててしまった。キリストの中に本当に入つてしまった。



神の前におけるキリストの碎け。キリストくらい本当に神の前に碎けているひとはない。その碎け、無私、これを私は「無」と言ったり、「碎け」と言ったりするけれども。それが即ち、無でもあり、碎けでもあり、本当の「従う」である。また、それは「の中に居る」である。もうこういう言葉は全部、切っても切れないところの事態をいろいろに表現しているだけです。そうやってきたら、あなた方は、また逆に言う、真理とはなんと簡単なものだろうか。力あるものは簡単なものです。

ところが、自己義認とか、我欲とかいって、自己が立って、いわゆる自由独立なんて言っているのが、実は偽りだ、虚偽だと言う。神を主とするか、サタンを主とするかで、真偽が別れる。光を主とするか、闇を主とするか。闇は光に勝てませんよ。どんな暗闇でも、そこに光が灯ればそこが明るくなってくる。光そのものをどんな深刻な闇が消すことができるでしょうか。

一つのローソクの光も、この部屋全体が真っ暗であっても、このローソクの光をこの暗黒が消すわけにいかん。ドイツのクリスマスツリーは本当のローソクを立てる。ここに飾つてあるものはドイツ製です。これは私の長女が持つてきてくれた。キャンドルサービスなんていうものをやるけれども、我々自身が本当にキャンドルそのものにならなかつたら、何のキャンドルサービスかというわけです。

●在らしめられている存在

⁴⁵ 然るに我は真を告ぐるによりて、汝ら我を信ぜず、

「我は真理を告げるのに、汝らは我を受けとらない」

と。分かってから信ずるのでは、もちろんない。受けとってみたら、なんと素晴らしい事態であるかということが分かる。

今の若い人たちの聖書に向かう態度が非常にまだるっこいわけだ。

「これはどういう意味でしょうか。こつちとあつちとどう辻褄が合うのでしょうか」

なんてやっている。辻褄が合うも合わないもない。キリストの言動、福音書というものにぶつかって、それは私の知情意を超越した素晴らしい事態だから、私はこれに投げかけて、それを本当に鵜呑みにするよりしかない。鵜呑みという言葉はあまり感心しませんけれども、すぐそれを呑み込んでしまわなくてはいかん。そこに入ってみたら、光の世界に入ってみたら、なるほど光というものはなんと素晴らしいことかということが、そのときに本当に分かる。光というものがこういうものであると、いくら説明されたつてどうにもならん。闇の中にいて、光はこういうものなんだなんて言つたつてね。光の中に入らなくては。

⁴⁶ 汝等のうち誰か我を罪ありとして責め得る。

責め得ることが出来る人があるなら責めてみよと、キリストは言われるわけです。これはもう神さまに完全に即していますから。



「私は、何もできない。何も言えない。ただ、神さまが言えということを言っている。やれと言っていることをやっているだけだ。どこに罪があるか。どこに自己というものがあるか」

と。「罪ありとして責める」というのは、キリストにおいては、

「どこに我を手放して我としているか」

と、こういうわけです。

まこと
われ真を告ぐるに、我を信ぜぬは何故ぞ。

「我は真を告げているのに、我を信ぜぬのはどういうことだ。君たちが知から出ていると言うなら、ああと言つてすぐ気がつくわけではないか」と。

⁴⁷神より出づる者は神の言をきく、

だから要するに、本当の生命への存在というものの、永遠の存在というものは、それは神から出て来ているもの。また、滅びへの存在というものはサタン、偽りから出ているもの。サタンは偽りです。なにかただウソという意味ではない。

この偽りという言葉は非常に強い。キリストが「偽善」と言うときには、いわゆる普通概念の偽善よりもっと強い。それ自身は結構なんです。パリサイ人はまことに品行方正、学術優等式です。けれども、それが自己義認をしているところにサタンのものがある。パリサイ根性がくる。だから、キリストはそれを、

「偽善なる学者、パリサイ人^{ひと}よ」

と言つて攻撃したのは、それは神を神として立てていない。それ自体はなるほど結構かもしれないが、もうひとつ高い法則、深い法則の世界に入ったら、それは偽りなんだと。

「神を神としてないものは本当ではないんだ」

ということですよ。

これは躓きの言葉です。人文主義者だったら、これは躓く。大体、エラスムスがマルチン・ルターを解しないのはそこにあるわけです。それ自体としては真理なんですよ、エラスムスの言っていることも。人本主義的なものからみれば結構なんです。我々が普段、そういう判断で相当いろんなことをしています。けれどももうひとつ、そのよってきたところの根を探してみるならば、本当のまことの世界は、私たちの存在は一切は神から受けているではないですか。我々の存在は、日本という歴史の中に、それぞれの社会の中で、それぞれのお父さんお母さんから、またいろんな意味において私たちは、この存在そのものは受けとっている存在で、

「私は自分でもって自分をつくった」

なんて言える人がどこにあるか。そういう、在らしめられている存在なんです、一切の意味において。知識を得るのも学校の先生のおかげです。私たちは昔、「四恩」(父、母、如来、説法法師の恩)ということをお教わった。四つの恩があるという。ところが、そういった感謝



の念、受けとったという、また大いにまだ学ばなければならないという面が非常に薄くなっているものだから、天野先生が、今の大体の教育の在り方はいかんというわけで、大いにやってらっしゃるわけですね。

そういうことで、私たちは在らしめられているんだ。太陽にだってお蔭をこうむっている。お天道さんがどこかへ行ってしまったらどうにもならん。それだから、私たちは全く感謝の存在で本来はあるはずです。それを何ものかと、自分をエトバス(何ものか)とすることが、それがもう偽りなんです。本当の現実を受けとっていないから、これは偽なんです。真ではない。その究極は、

「一切のものは神より出で、神によりて成り、神に帰する」

という、神を立てていること。神に自分を返していく。神の本願が来ますから。本願に對して悲願をもつて——こないだも、「南無阿弥陀仏」の「南無」は帰命だと言った——この帰命していくところの、その気持。ここに真がある。ここに真理がある。なるほど、偽りというのはただウソとかいうのとはもつと根底的な魂の方向、質の問題であるということが非常につきりと分かるわけです。サタンは、神の在ることを知ってますよ。けれども、傍若無神である。傍ら神無きが若くにあるのが、これがサタンの偽りの世界です。

汝らの聴かぬは神より出でぬに因る』

だから、神より出る者は神の言を当然聴くが、汝らの聴かないのは神から出ていない。サタンから出ているからだ。

48 ユダヤ人こたえて言う『なんじはサマリヤ人にて惡鬼に憑かれたる者なり
と、我らが云えるは宜ならずや』

とんでもないことを言い出した。

49 イエス答え給う『われは惡鬼に憑かれず、

「私が少し普通の人と変わったことを言ったりしたりすれば、惡鬼、ダイモニオンに憑かれたとお前たちは思うが、とんでもない」

と。靈にも、神の靈あり、サタンの靈あり。また、靈にもいろんな段階がある。

●靈法に従うのが自由

反って我が父を敬う、なんじらは我を輕んず。50 我はおのれの榮光を求めず、
之を求め、かつ審判し給う者あり、51 誠にまことに汝らに告ぐ、人もし我が

言を守らば、永遠に死を見ざるべし』

ここに「守る」という言葉が出てます。その後にも「言を守る」という言葉がところどころに出てきますけれども。「守る」というと、なにか少し窮屈な感じがするんだよね。法を守ることを遵法という。「法を守りて自由あり」なんて、私は校歌に書いた。これは遵法
の精神。学校の法則に従うところに自由がある。神の法則に従うところに自由がある。



またこれはちよつとキリストは皮肉つて言った。「お前たちが神と言っているのが、実はそうなんだよ」と。

55 然るに汝らは彼を知らず、我は彼を知る。もし彼を知らずと言わば、汝らの如く偽者たるべし。

「お前たちは知っているとと言うと、そいつが偽りだし、もし私が知らぬと言ったら、それが偽りとなる」と。

然れど我は彼を知り、且その御言を守る。56 汝らの父アブラハムは、我が日を見んとて楽しみ且これを見て喜べり』

●アブラハムの投げ込み

これは創世記22章ですから、ちよつと開きましようかね。イサクを献げたところですよ。「お前の子孫は浜の沙の如くなる」

と約束した、「その独り子イサクを献げろ」と言われて、「はい、いいですよ」と、献げてしまった。それで――「はい」とも言いやしない――彼は直ちに行動に移ったわけです。ところが、17節に、

17 我大いに汝を祝み又大いに汝の子孫を増して天の星の如く浜の沙の如くならしむべし。汝の子孫はその敵の門を獲ん。18 又汝の子孫によりて天下の民皆福祉を得べし。汝わが言に遵いたるによりてなりと。(創世22・17、18)

アブラハムが神さまの言に従って、ウルを出て行って、親族から離れてしまつて、全く彼は無手勝流だ。神の御言に従って自由自在に歩いていた。そして、与えられたイサク――これは百歳になつて与えられた子どもだ――祝福の子であると言つて大いに約束されたのを、「それを献げろ」と言われた。これも、「はい」と言つた。全部、アブラハムは神の言の中に自分を投げ込んで――自分の判断ではない――自分を投げ込んでいく。ここに本当の無私、本当の自由、本当の力があるわけです。それでこれが「信仰の祖」と言われるわけです。この「汝わが言に遵いたるによりてなり」と創世記で言われている、これをキリストが思われたわけです。「そのやがて祝福されることを楽しんでいたのだ、見て喜べり」と。

57 ユダヤ人いう『なんじ未だ五十歳にもならぬにアブラハムを見しか』

「お前は偽りではないか」と言うわけだ、今度は。

58 イエス言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、アブラハムの生れいでぬ前より我は在るなり』

これは非常に強い言葉で、福音書の中の非常に著しい言葉の一つです。

「私は、アブラハムがこの世の中に出てくる先から、自分はちゃんと在った」

と。なんと不思議なひとだろうか。永遠の存在者の、神の懷の中に自分は居たんだと言う。「懷の中に」というのは非常に大事な言葉ですね。



私たちの存在も、私たちがこの地上に来る前に、神の神秘的な不思議な計画のもとにその存在が約束されていたようなものです。いわんや、神の子キリストは、一切の被造物の先に、ヨハネ伝でいえば「ロゴス」として――言葉は何と言おうといいけれども――霊的実在として在った。それが時満ちて、今から二千年前にナザレのイエスとして馬槽に現われた。こういったような絶対次元の現実はどうてい我々の想像を絶するところのものである。

こういう神の御霊の具体的実存者がもう過去・現在・未来を通じて永遠に実在している。

「昨日も今日も永遠に変わらず」

というように実在する。その変わらざる本質を持ったものが実に千変万化の態様をなして言葉を発し、また行為をなしている。こういった事態がどうてい読めていない。これは神から出てこなくては。

●絶対無条件の恩寵の世界

我々は神から出てこないが、ではどうしたらいいんですか。どうにもならんですね、神から出てくるなんてことは。実は、神から出ているんだけど、私たちは即ち、

「神の似姿に造られている」

とアダムに言われているとおり、我々の本質は神性をおびている、本来は。これがもう非常に実力を失ってしまったところに罪びとと言わざるをえないところがあるわけです。けれども、いくら罪びとでも、これは神性がなかったらどうにもならんですよ。

「善を欲するものがわがうちにある」

というのは神性があるということです。けれども、

「どうしても悪の法があつて、どうにもならん。ああ、われ悩める人なるかな、

この死の体」からだ

と、パウロがローマ書7章で言っている。

「しかし、感謝する。イエス・キリストのゆえに」

と言っている。即ち、神性をおびているが、実力のないものである。しからば、その神性をそのまま発揮したところの、具体的なただ一つの例外者、このキリストの中に自分を入れていくよりか仕方がない。ここにおいて神を見るよりか仕方がない。

「我を見し者は父を見しなり」

という、ここにおいて神を見る。

だから、そこに入るのに――もういつも申し上げているとおり――十字架という門を通して入る。門は開かれているのだから。キリストの中に入れるのだから。

「はい、お前はあるがまま、ダメなまんまでいいよ。なんにも整える必要はないから。躓いても転んでも構わない。何回躓いても転んでも、私は赦す。私の十字架は、『あの回数以上間違えたらもうお前は赦さん』という、そんな十字架ではない」



と。絶対無条件の恩寵の世界です。マイナス99の生涯を通してきた盗賊が、

「もう、仕方がありません、私は。せめても、覚えてください」

「よし。今日、お前は私と一緒にパラダイスにいる」

と。これが福音でしょ。そういう絶対無条件の十字架の門を通して、あるがままの自分を投げかけたらば、その世界は光の世界だから、その光の中に化せられていく。

こないだも申し上げたように、同化されていくわけです。同化現象を起こしていく。それは、人間の生れつきによつていろいろ同化現象の起こし方が違いますよ。いいですよ、どうでもとにかく、それは同化現象を起こしていく。その絶対恩寵に、本当に自分は何ものをもつても代えることができないと言つて、喜び勇んで行くのが、この福音のクリスチャンではないですか。それを人間的な判断で何を言っているかと私は言いたい。この世界に本当に自分を入れて、日に日にこの喜びに――毎朝お天道さんが現れてくる、それを喜んで――進んで行く人は、本当の意味における救いは何であるかを本当に身に体している人です。ところが、自分の側を、なにか実存というものをしよっちゅう気にしているものは、それは良きそうだが、実は本当の世界には質的には入っていない。そういう意味において、質的に本当に入れば、

「何がどうなつても、もうこの喜びは私は何ものとも代えることはできません。何

と言われても、私は進んで行きます」

と、それだけのことが言えるはずです。君たちは、そういうクリスチャンになつてもらいたい。この光の中に、神に即していく。

「わが言の中に居る」

とは、居る資格があるから居るのではない。資格がないから、ダメだから、居るんです。

そういうようなことが、キリストへの信である。運命環境、人の判断、そんなことはどうでもいい。そんなことは私はひとつも気にしてません。私はただこのキリストのこの本願にもう全身を投げ出し、全身を歓喜の喜びとして進んで行くだけです。

どうぞ、皆さん、私たちの福音はそんな相対的な判断を何のかんのと云っている世界ではないぞと。それが本当に聖霊における展開です。御霊がここにおいて光る。光は御霊、その御霊の信の世界は、これは何としても私は、全世界が何と言おうとも仕方がない。

●碧眼録の第23則

碧眼録の第23則の所にちよつと面白い言葉がある。「真偽如何」と私は題に揚げたのでね。

「垂示に云く、玉は火を將て試み、金は石を將て試み、剣は毛を將て試み、水は杖を將て試む。衲僧門下に至つては、一言一句、一機一境、一出入、一挨一拶に深淺を見んことを要し、向背を見んことを要す。且く道え、なにを將てか試みん。請う拳し看ん。」

宝玉は、それが真であるか偽であるかは、火にかけてみるとわかる。火もおこれを焼



くことができない。それによって変質することがないというときに、本当に玉の玉たるゆえんが分かるという、昔の人の試し方だった。ダイヤモンドを火の中に入れたら燃えてしまう。しかし、これはダイヤモンドだと分かる。とにかく、火をもって試みる。昔のシナでは炭火でもって三日三晩燃やして、変色変質しないものをもって本ものとしたという。

金は石をもって試す。試金石という言葉はそこから来た言葉です。金が本当の金であるか、純金であるかを試すのに、丸い真つ黒な石があつたそうだが、それで金に傷を擦りつけると、その筋の現われ方で分かるんだそうですが、そういう試金石という石をもってする。

剣は毛をもって試みる。刀の切れ味というものは、一筋の毛髪を剣の刃に吹き寄せたときに切れれば、その剣は素晴らしいという。それがその試し方だそうです。日本刀なんかは、そつと髪を当てただけでも切れてしまうような、「吹毛の剣」というね。

それから、水は杖をもって試みるというのは、水の深浅は杖を立ててみると分かる。ちよつと上から見ただけでは分からないから、杖を立ててみてその深いか浅いかを、また底が砂であるか何であるかを――濁っている場合はそういうことも分かるわけですが――そういう言葉があるわけです。

人間の在り方も、その人の

「二言二句、一機一境、一出一入、一挨一拶に深淺を見んことを要し、向背を見んことを要す」

という。その言葉が果たして本当に心の奥から出ている言葉か、頭でものを言っているか。その行為が本当に真心あるものであるか、ただ上辺のものであるか。

「巧言令色すくな鮮し仁」

という言葉があるけれども。どんなにへたにみえても、真は真として映りますから。「一機」というのは顔の表情だそうです。顔つき、目つき、顔色なんてなものでもって分かる。また、「二境」というのは、自分の環境に対して心の働くその状況を「一境」というのだそうですが。「二挨一拶」というのは、「こんにちは」とか、「きよなら」とか、「いいお天気ですね」とかというような言葉の中に、またお辞儀するときの気持、態度などにおいて表れるもの。

●聖霊の試練

「火をもつて、石をもつて、毛をもつて、杖をもつて」

という。私たちは私たちの真偽を神の前に、また人の前に問われるようなときに、何もそんなことを心配する必要はない。その試みに対して、人間ですから、いつも及第するとは限らない。みんないつも及第していたら、もうこれは本当に義人ですよ。しばしばその試みに私たちは落第いたします。けれども、その火となり石となり毛となるところの、また杖となるところのもの。これは御霊である。

私たちが本当に聖霊の前に、また聖霊の中に接するとき、実は私たちを試みようとする



ところの、その試金石であり、また吹毛であるところの事態。それは逆に私たちを本当に試み練るものです。試練です。試練して、その素晴らしい中へといよいよ入れていく。落とし穴のための試みではなくして、私たちをいよいよ本ものにするための試みである。我々がウソものであるかどうかなんてことを心配することはいらん。

もうひとつ奥の、御霊においてそこが試練されているときに、その相対的なものを全部乗り越えていくところの、勝っていくところの玉となり、金となっていく。相対的にでつくわすものに対して、いつもどうだこうだと自分を考えているうちはダメですよ。どんなものでも来なさいと。これはペテロがちゃんと言っている。

「どんな患難をも喜ばなさい。それは汝らにおいて聖霊があることが表れんがためである。聖霊の光がいよいよお前たちに表れ、また留まらんがためである」

と。ペテロ前書4章12節、

「¹²愛する者よ、汝らを試みんとて来れる火のごとき試練を異なる事として怪しまず、

お前の運命はみんなの運命と同じだよ。どの人生にも雨の日はあるよと。

¹³反つてキリストの苦難に与れば、与るほど喜べ、
なぜ、喜べるか。聖霊が来ているから。

なんじら彼の栄光の顕れん時にも喜び楽しまん為なり。¹⁴もし汝等キリストの名のために謗られなば幸福なり。栄光の御霊、すなわち神の御霊なんじらの上に留まり給えばなり。」(ペテロ前4・12、14)

と。栄光の御霊、本当の試金石がお前たちの中にあるから、外から来るいろんな試みなんて何だと。これは聖霊における事態が表れ、神の栄光が表れるためだぞと。もう心配はいらん。パウロが、患難にも乏しきにも富めるにも、悩みに苦しみに遭つても――あのコリント後書11章で言っているとおり、あのパウロくらいの患難に遭つた人はまずちよつとそうはしないでしょうね。遂には彼は殉教の死をとげる――一切の秘訣を得たりと。みなこれ本当の凱歌である。ヒルティが、

「人生の段階の終りにおいて、一番本当の死に方は何らかの意味において、それがその国のため、その人類のためであるような死に方、ただ回りの人たちに看取られて安泰に死ぬ死よりも、そういった何か殉教的な死が本当の死だ。本当の人生の終りだ」

と言った。ゴルドン将軍のことがそこに出ている。カートウームであれだけ土人に親しまれ尊敬されたゴルドンが、別な勢力のために倒れていった。どうぞ、徳富蘆花の『ゴルドン伝』は一遍読んでみてください。私は感激して泣いて読んだ本です。



●聖霊の試金石

とにかく、どのようなことがありましても、御霊の人となりましたならば、自分がどうであろうと人が何であろうと、また、環境がどうであろうと、運命がどうであろうと、

「何が来ようと、本当の勝利はあるぞ」

と。これが言えなかったならば、

「我既に世に勝てり」

というキリストの、「キリストに在る」という者ではない。もう、いわゆるノイローゼも、何もかもみんなすつ飛んでいつてしまふ。大丈夫です。だから、私は言うんです、

「いざというときに、この聖霊の信仰でなければもたないぞ」

と。御霊が私の中核に核を結んでしまった。あいかわらず人間小池はダメかもしれない。いいです、どうでも。私は自分なんかに期待してません。期待しているのはキリストだけです。私はどう言われようと、どんなことをされようと――皆さんがみな去って行こうといい――私は行きます。

そういうわけで、この聖霊というものは、私にとってはただ一つの本当の試金石であり、またこの試金石は私を鍛えてくれるところの、私を本ものにしてくれるところの、真偽如何をここにおいて定めるところのものである。クリスチャンの真偽は、

「聖霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」

と、パウロが真偽如何をローマ書8章9節で宣言している。

こちら側のどうのこうのと、そういうことではない。しかし、本当の世界に入っていけば、どんな人でも必ず本当の展開をしていく。その展開する姿に、

「滑つても転んでもあの人は進んで行きます、本当にうれしいなあ」

と、こういう人になってください。

ひとつの現象を見て、すぐ人の品定めをしてみたりするのはとんでもないことです。どしどし、聖霊における真の展開をやっていくときに、

「俺たちは四七士よりも固い結びがあるぞ」

と。これはパウロがローマ書8章で言っているとおりの、

「このキリストの聖霊の愛から私たちを離す何ものがあるか」

と。そして、これは何も小さな垣^{かき}をつくるのではない。これを本当に全世界に、

「ザイト・ウムシュルンゲン・ミリオーン」(抱き合え、幾百万の人々よ！)

とシラーが歌ったあの壮大な悲願、みなあれは神の真の世界から彼らの音楽も文学も発しています。だから、いわゆる「メンタル・テスト」もへったくれもないですから。そういう意味において、どうぞ、我々は聖霊において鍛えられていくところのクリスチャンである。真の玉となり、真の金となり、真の剣となり、真の水となって進んで行きます。

